

## 国立国語研究所学術情報リポジトリ

Test survey about changes in use of letters on magazines covers : Mainly in "Shuhu-no-Tomo", "Shukan Asahi" and "Bungei Shunju"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中野, 洋, 中川, 美和 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001980">https://doi.org/10.15084/00001980</a>

# 雑誌三種の表紙における文字使用の変化

中野 洋

(国立国語研究所)

中川 美和

(国立国語研究所)

## キーワード

文字数, 文字種, 1970年代, 表語性

## 要 旨

1950年代から1994年までに発行された雑誌の表紙の文字種, 文字数について, 予測のための実態調査を行った。そのうち、『主婦の友』『文芸春秋』『週刊朝日』の雑誌三種を中心に調査結果を報告する。表紙の文字数については, 増加傾向にある雑誌, 文字数の変化しない雑誌, 1970年代まで増加し, その後減少する雑誌がある。また, 表紙の文字種については, 平仮名の割合が他誌よりも高い『主婦の友』, 片仮名の割合が高い『平凡』など, 雑誌ごとの特徴があることが明らかとなった。

## 1. はじめに

日本語の表記は, 音声・文法・語彙に比べ容易に変化しえるものである。なぜなら, 日本語は, 平仮名, 片仮名, 漢字, 英字と四つの文字体系を持ち, そのいずれでも表記が可能だからである。それに加えて, この50年間に日本語の表記・表現にかかわるいろいろな変化があった。すなわち,

- ・ 当用漢字・常用漢字, 送り仮名の付け方, 現代仮名遣い, 外来語の表記など国語政策の変化。
- ・ 電算写植やワープロの開発・普及など印刷技術の変化。
- ・ 日本経済の発展と通信放送技術の進歩による情報の多様化, 国際化。このことによる人々の関心の多様化。日本語については専門語や外来語の増加, 外国語の流入など。
- ・ 日本における英語教育の振興による英語理解力の増加。

さらに, 最近では, 紙からCD-ROMの使用あるいは電子メールなど文字記録媒体の変化, 文字に加えて絵・写真, 音声, 動画など情報の視覚化, マルチメディア化が起こっている。

ところで, 表紙は, 雑誌の顔である。もし, 読者が表紙によって雑誌を買うか買わないかを判断するのだとすれば, 編集者は, その雑誌を売るために表紙にさまざまな工夫を凝らすに違いない。

例：『主婦の友』（主婦の友社）表紙



34巻12号（1950.12.1）



40巻12号（1956.12.1）



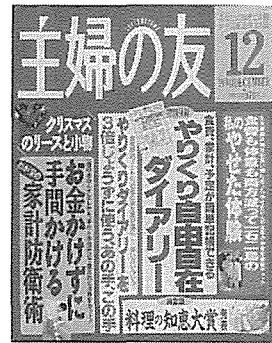
49巻12号（1965.12.1）



59巻12号（1975.12.1）



69巻12号（1985.12.1）



78巻13号（1994.12.1）

上の例は、『主婦の友』の表紙を時代別に並べたものである。これを見ると、絵が写真になった、活字が写植になった、縦組み・横組み・斜め組み、筆書き・明朝体・ゴシック体・斜体など、組みや書体が多彩になった、文字に色や飾りがつき文字通りカラフルになったなどの変化が認められる。

これらの変化は、大なり小なり他の雑誌にも認められることである。

ところで、このような変化は、一時的な現象なのか、それとも永続的な現象なのか、さらに新たな変化が起こり得るのだろうか。

我々は、変化の激しい雑誌表紙の表記を取り上げ、その変化予測のための実態調査の一端として、文字数・文字種<sup>1</sup>についてのテスト・サーベイを行った。本稿は、そのうち、雑誌三種の表紙の文字数・文字種の調査・分析結果を報告するものである。主に以下の点について述べる。

- ・調査の方法
- ・調査対象資料
- ・調査報告

## 2. 調査の方法

1950年代から1990年代の任意の雑誌を選び、表紙の文字数・文字種の調査を行った。

比較に際しては、それぞれ、1955年、1965年、1975年、1985年、1994年を中心に、月に二冊以上発刊される雑誌の場合は、毎月一番早い日に発行された雑誌をとりだし、各年十二冊ずつを対象とした。ほぼ十年間隔の一月一冊の等間隔抽出である<sup>2</sup>。ただし、雑誌によってはこの基準どおりにそろえることのできないものもあり、これらは、参考程度に扱った。

調査分析にはパソコンを用いた。データ入力、中川のほか、錦織聡子（言語体系研究部 非常勤研究員）、小林良子（言語体系研究部 アルバイト）が担当した。そのほか、データ入力の一部は、東京コロニーによる。プログラムは、mozi1.awk, mozi2.awk, mozi3.awk (NAKANO hiroshi 作成)<sup>3</sup>を用いた。

調査対象は表紙の文字だが、背表紙、裏表紙は対象外とした。また、写真の文字、「大正11年2月25日第3種郵便物認可 通巻4001号 1994年1月14日発行（毎週金曜日発行）」<sup>4</sup>などの文字はのぞいた。

## 3. 調査対象資料

次の三種を主な調査対象資料とした。数字は発行年。（ ）内は冊数を示す。

週刊朝日	1950 (12)	1955 (13)	1965 (12)	1975 (12)	1985 (12)	1994 (12)	計73
主婦の友	1950 (12)	1956 (12)	1965 (12)	1975 (12)	1985 (12)	1994 (12)	計72
文芸春秋		1955 (12)	1965 (12)	1975 (12)	1985 (12)	1994 (12)	計60

これらは、戦後50年継続して発行している雑誌である。それぞれ、新聞系、実用系、文芸系を代表している雑誌としてとりあげた。なお、『現代雑誌九十種の用語用字』（国立国語研究所、1962）の分類に従うと、『週刊朝日』『文芸春秋』は「庶民」、『主婦の友』は「生活・婦人」となる。

さらに、次の五種を、調査項目によって参考資料とした。

映画の友	1950 (7)	1956 (12)	1960年代 (11)				計30
科学朝日		1956 (12)	1960年代 (9)		1980年代 (12)		計33
女性セブン <sup>5</sup>			1967 (1)	1975 (15)		1994 (12)	計28
平凡		1952 (12)	1965 (6)	1975 (6)	1985 (6)		計30
モーターファン <sup>6</sup>			1960年代 (12)			1994 (12)	計24

以上のように、『週刊朝日』『主婦の友』『文芸春秋』の三種の雑誌を主体として、計八種（総冊数350）の雑誌の表紙についての調査を行った。

分析では、調査対象を1950年代から10年間隔で五つにまとめ、それぞれを各年代の代表として扱った。なお、各年代の雑誌の冊数は各年十二冊ずつを基準にし、数の足りないものは比較の際

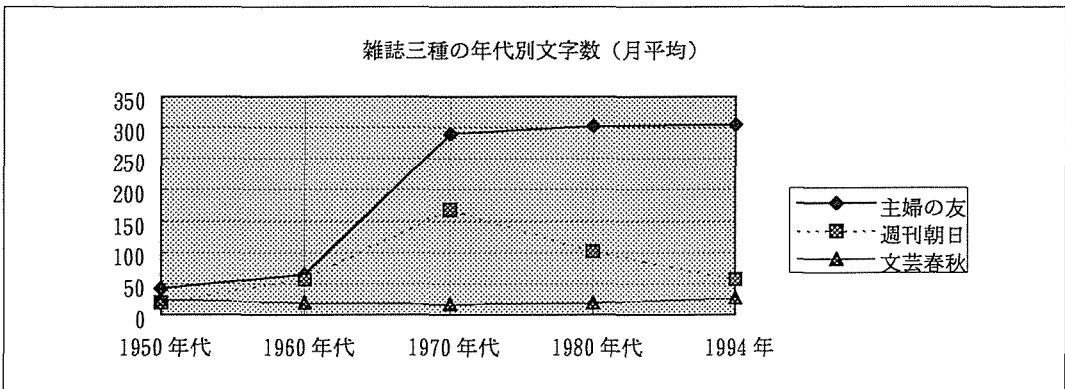
にのぞいた。ただし、『平凡』の1960年代、1970年代、1980年代は、それぞれ六冊分（半年分）しか収集しなかったが、比較の対象とした。また、『主婦の友』の1950年代は1956年分をあてた。

#### 4. 調査結果

雑誌の表紙に印刷される文字数と文字種について、雑誌別・年代別の変化を調べた。

##### 4.1. 総文字数の変化

図1 『主婦の友』『週刊朝日』『文芸春秋』雑誌三種の年代別総文字数（月平均）



##### 4.1.1. 表紙の文字数が増加している雑誌

まず、『主婦の友』（図1）に注目すると、1970年代に急激に文字数が増加し、その後、ゆるやかに増えつつあることがわかる。内容は、1950年12月号では、雑誌名、発行月、付録の内容を示す（例えば「流行の和洋冬物全集」など）程度であるが、1975年12月号ではそれに加えて特集名「健康に美しくやせる」「クリスマスのお菓子」「評判！葛根湯健康法」のように、本文の内容をさらに詳しく示した見出しが増え、さらに1994年12月号では、写真を廃し、表紙のほとんどが「お金かけずに手間かける家計防衛術」「クリスマスのリースと小物」のような見出しになっている（例参照）。

そのほかにも、『平凡』（図2）は、年々増加傾向にある。『女性セブン』『モーターファン』『科学朝日』などをみても、後年のもののほうが文字数がふえている（図2）。今回調査した雑誌の多くは、年代がくだるにつれ、表紙の文字数が増加する傾向にある<sup>7</sup>。

さて、『主婦の友』の文字数の伸びがもっとも大きいのは1970年代である。1960年代から1970年代にかけて文字数を四倍に増やしている。『平凡』も同時期、同様に文字数が二倍に増えている。

##### 4.1.2. 表紙の文字数があまり変化しない雑誌

『文芸春秋』（図1）は、1950年代から1994年の間に、表紙の総文字数があまり変化していない。他の雑誌と比べ文字数は少なく、月平均20字程度で、年代がくだってもほとんど増えていない。表紙の内容は、「文藝春秋」という雑誌のタイトルと号数が中心である。1970年代に「現代の魔女

狩り」<sup>8</sup>などの一行の見出しが加わっているが、1994年にいたっても「与党税調「密室の議事録」全公開／特捜部はどこへ行く」<sup>9</sup>のように一行を超えることはない。

1970年代には『主婦の友』が総文字数を四倍ちかく増やしているのに対し、『文芸春秋』には1970年代の増加現象もみられない。

#### 4.1.3. 1970年代をピークに増加，その後減少する雑誌

『週刊朝日』(図1)は、いったん増加しながら、その後減少する。

『週刊朝日』の55巻24号(1950.12)は雑誌名、発行月日、価格のみであり、70巻52号(1965.12)もそれに「アマゾンの源流をさぐる」など二行の見出しを加えた程度で文字数は少ない。そして、『主婦の友』と同様、1970年代に急激な総文字数の増加をみせる。80巻52号(1975.12)には「決定版 来春高校入試の合格圏偏差値の予測が出た!」「財産防衛指南「高利・税優遇」と大売り出しの国債は損か得か」「“日本のキンゼイ報告”発表 ここまで来たヤングの性」など縦組み、横組み、斜め組みのさまざまな見出しが表紙に見える。ところが、1980年代、1994年と年代がくだるにつれ、徐々に減少していき、1994年の調査では、ほぼ1960年代と同じくらいの文字数に落ちついている。99巻50号(1994.12)の見出しは、「この社長の出处進退を採点。」のみ。このような文字数の変化はおそらく偶然ではなく、編集方針の変更など何らかの意図が反映されたものと思われる。

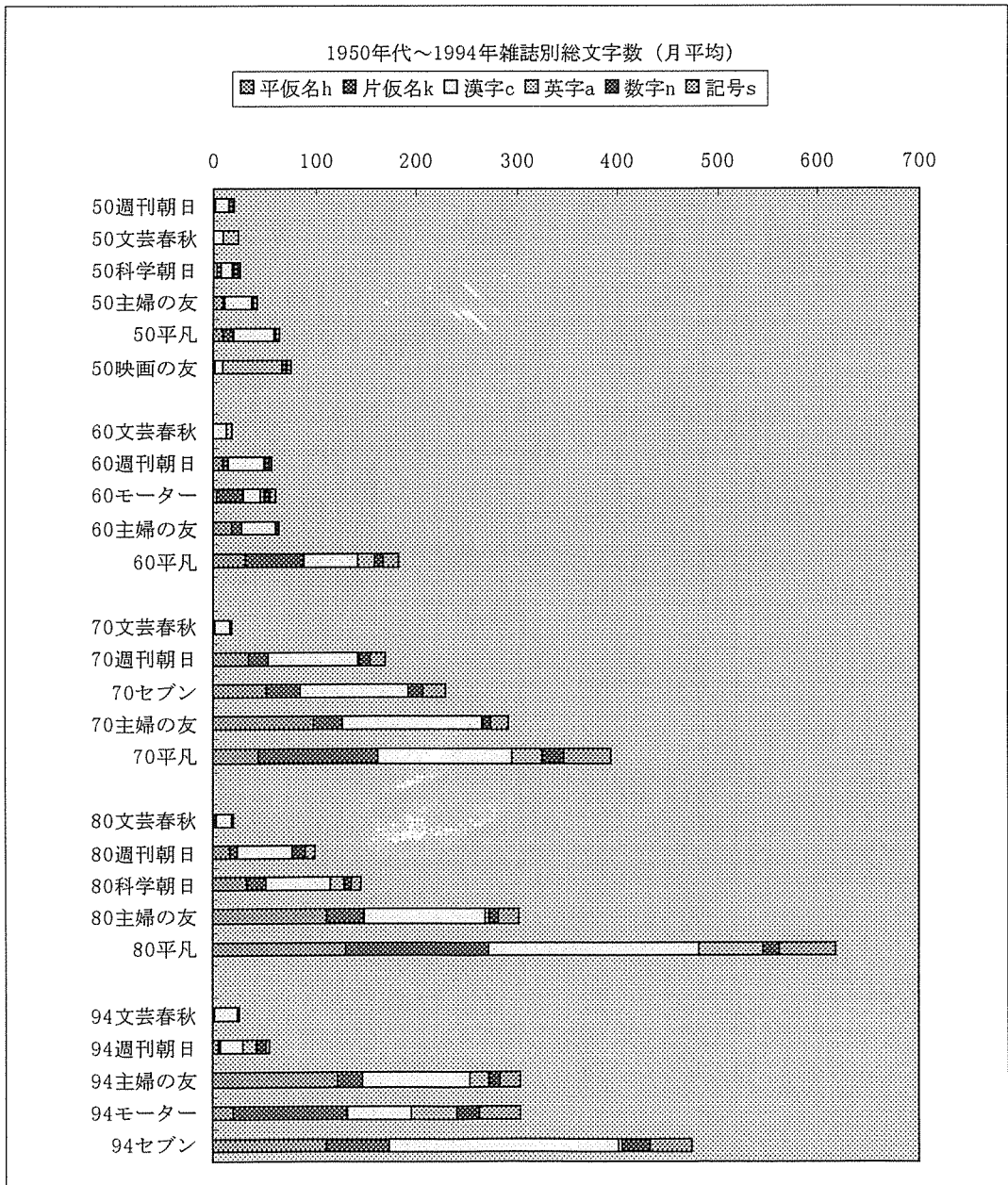
#### 4.1.4. 全体の傾向

『主婦の友』は文字数が増え、『文芸春秋』は文字数が少ないままあまり変わらず、『週刊朝日』はいったんは文字数が増えるものの、1970年代を境に減少する(図1)。

また、『主婦の友』では1970年代がもっとも文字数の増加した年代である。『週刊朝日』でも1970年代には1960年代の約2.9倍と大幅に増えている。その他の雑誌(図2)でも1970年代には、表紙の月平均の文字数が急激に増加している。『文芸春秋』をのぞくと平均字数は60字から200字に分布していたものが、160字から400字と増加したのである。したがってこの現象により、本稿では、1970年代を文字数における一つの節目としてとらえたい。

さて、全体の変化の傾向をおおまかにいうと次のようになる。1950年代のような、雑誌名、発行月、など最小限の文字情報を中心にした初期の段階の次に、1970年代にみえるように、急激に表紙の文字数が増加する段階を経る。その後、1994年の雑誌は、月平均300字以上の総文字数の多い雑誌(『主婦の友』『女性セブン』『モーターファン』)と、総文字数が月平均60字以下の少ない雑誌(『週刊朝日』『文芸春秋』)に大きく分かれている。

図2 1950年代～1994年雑誌別総文字数（月平均）



#### 4.2. 文字種の変化

表記の文字種の特徴、雑誌三種の使用文字種の特徴、文字種分布からみた雑誌の特徴について述べる。

#### 4.2.1. 表紙の文字種と本文の文字種

表紙の文字種は一雑誌においてどのような分布をみせるのだろうか。

『週刊朝日』および『主婦の友』で、表紙と本文<sup>10</sup>の文字種を比較すると、図3のように表紙は、本文にくらべて漢字の割合が高く、平仮名の割合が低い。『週刊朝日』では表紙の平仮名15.6%、漢字53.1%に対し、本文の平仮名49.5%、漢字33.2%である。『主婦の友』では、表紙の平仮名33.9%、漢字44.2%に対し、本文の平仮名55.8%、漢字23.6%となっている<sup>11</sup>。

図3 表紙と本文の文字種の比較

図3.1 『週刊朝日』

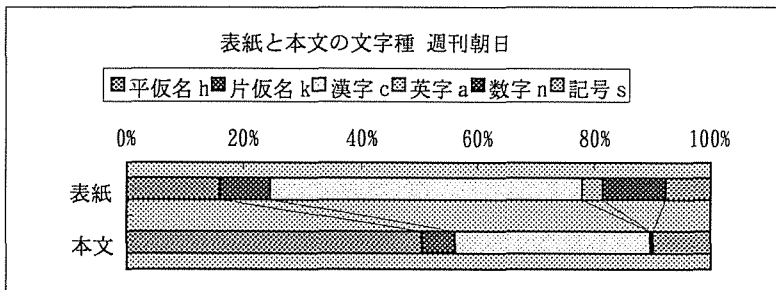
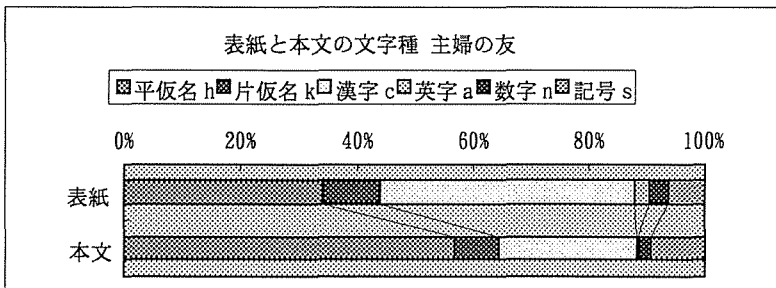


図3.2 『主婦の友』



表紙では、雑誌名や絵、写真を入れ、そのうえ大きな文字で内容をあらわすことばを入れるので、たくさんの文字を入れることはできない。そのために、表語性の高い漢字の割合が高く、平仮名が低くなっているといえる。表紙とはスペースの大きさがちがうが、中野洋 (1979) 108頁でも、スペースが限られた新聞の三行広告では極端に平仮名の使用率が低いことが指摘されている。

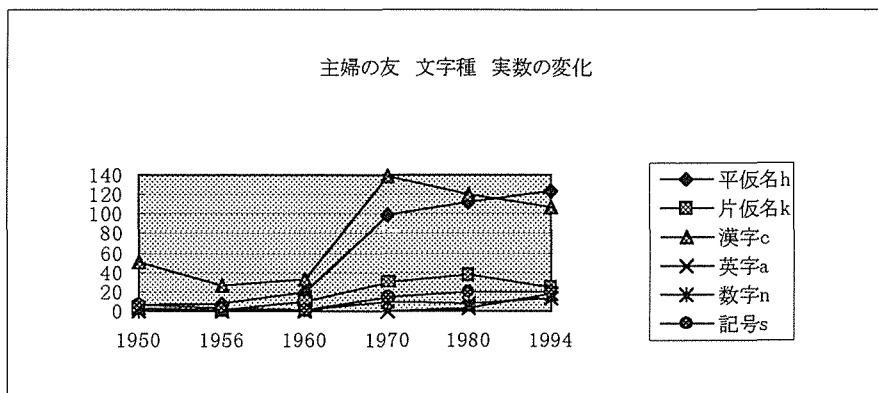
#### 4.2.2. 雑誌三種の文字種—平仮名の割合の増加と文字数の増加

先に述べた通り、『主婦の友』の表紙の文字数は、1970年代で急増する。それは、図4.1の「主婦の友 文字種 実数の変化」を見ればわかるように、漢字と平仮名の増加によるものである。ことに平仮名の増加は著しく、1980年代には漢字とほぼ同じになり、1994年には漢字よりも多くなる。このように、『主婦の友』では、総文字数が増加するにつれ、平仮名の割合が高くなってい



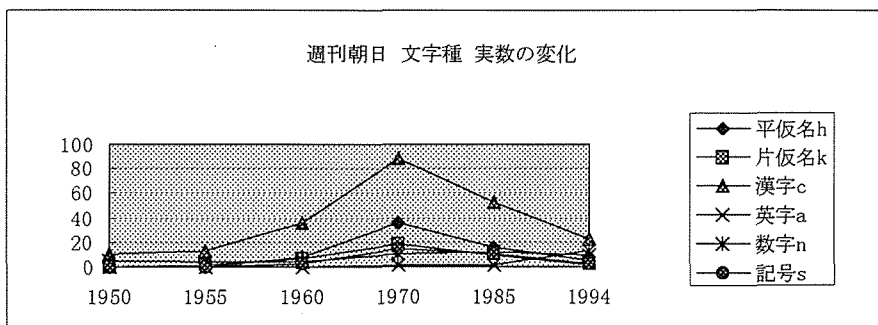
る。

図4.1 『主婦の友』年代別文字種



『週刊朝日』の文字数が増えた1970年代の内訳は、図に示す通り漢字の増加によるものである。平仮名も増加しているが、『主婦の友』ほどではない。これは文字総数の違いによると思われる。つまり、総数がある程度以上多くなった場合、漢字が多すぎるとかえって読みづらくなり、また漢字で表される名詞に対して動詞の類や形容詞の類が増え、結果として平仮名の方が増加率が高くなるのではないかと考えられる。このことの実証は、表紙の語彙調査の次の報告で示す。

図4.2 『週刊朝日』年代別文字種



これらに比べ、『文芸春秋』の文字種は、各年代にわたって、漢字の割合が高く、平仮名の割合が低い。図2の「雑誌別総文字数」の『文芸春秋』の場合を見れば、先に確認したとおり文字数が少ない、かつその内訳がわかる。これは、積極的に漢字を選択してきたというよりは、他の文字種が介入する余地がなかった結果と考えられる。

#### 4.2.3. 文字種の分布

雑誌ごとに、各年代の合計で文字種の分布<sup>12</sup>を、図5Aと図5Bに示した。いずれも文字種分布に特徴がみられる。

まず『週刊朝日』と『主婦の友』の本文の文字種分布を示す。どちらもほぼ同じ形である。これに近い表紙の文字種分布は、総文字数の大きい『主婦の友』である。

『平凡』も表紙の総文字数が大きい、図5 Aにみる通り、他誌よりも片仮名の割合が大きく、平仮名が20%に近く小さい値となっている。

平仮名が20%に近いのは、他に『女性セブン』と『週刊朝日』がある。このふたつはまた、漢字の割合が大きいことでも共通している<sup>13</sup>。このふたつは、文字数を増やせば、平仮名の割合が高くなるだろう。しかし、『週刊朝日』は前にみたとおり文字数を減らしており、平仮名の割合が減り、漢字の割合が増えて『文芸春秋』の分布に近づいているといえる。

平仮名の割合が極端に少なく、他の文字種が多い雑誌に『映画の友』『モーターファン』『文芸春秋』がある。

以上、文字種分布の特徴をあげれば、次のように言える。英字<sup>14</sup>の割合の高い『映画の友』<sup>15</sup>、漢字の割合の高い『文芸春秋』、片仮名の高い『モーターファン』『平凡』、平仮名の高い『主婦の友』。

これらは、いずれも語の表記を反映している。たとえば、『映画の友』では外国人女優の名前、『科学朝日』では「NASA」「SDI」など、『平凡』「SONG」「SWEET」などの語がある。いずれもその雑誌の特徴を示す語である。片仮名の割合の高い『モーターファン』では「エンジン」「ドライブ」などの語、『平凡』では「グラフィア」「ポスター」などの語がみえる<sup>16</sup>。『文芸春秋』が他誌よりも英字が多いのは、誌名のローマ字表記のためである。

先に、表紙の平仮名の割合が極端に少なく、他の文字種が多い雑誌として、英字の割合が他誌よりも高い『映画の友』、片仮名の多い『モーターファン』、漢字の多い『文芸春秋』をあげた。これも、語の表記を反映した結果である。いずれも平仮名の割合は10%以下と低く、総合雑誌である『週刊朝日』などとは異なっている。特定の読者層をひきつける、英字の女優の名前（『映画の友』）や、片仮名の車名（『モーターファン』）などが表紙に並んだ結果であろう<sup>17</sup>。

図5 A 表紙における雑誌別文字種 (%)

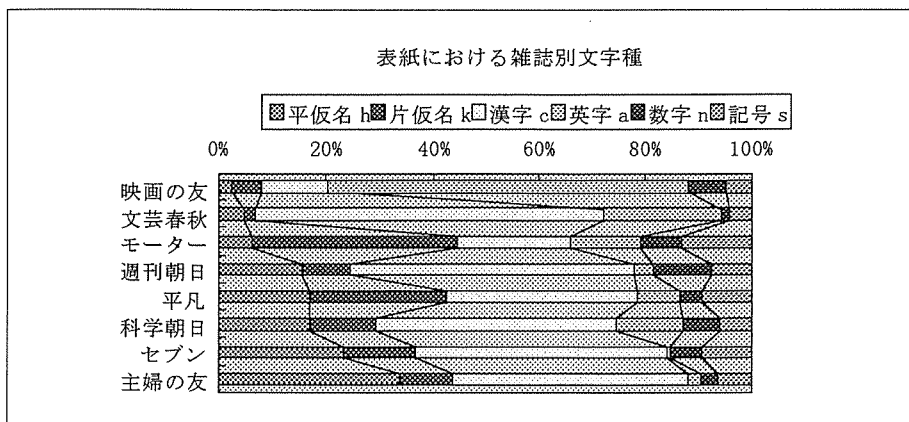
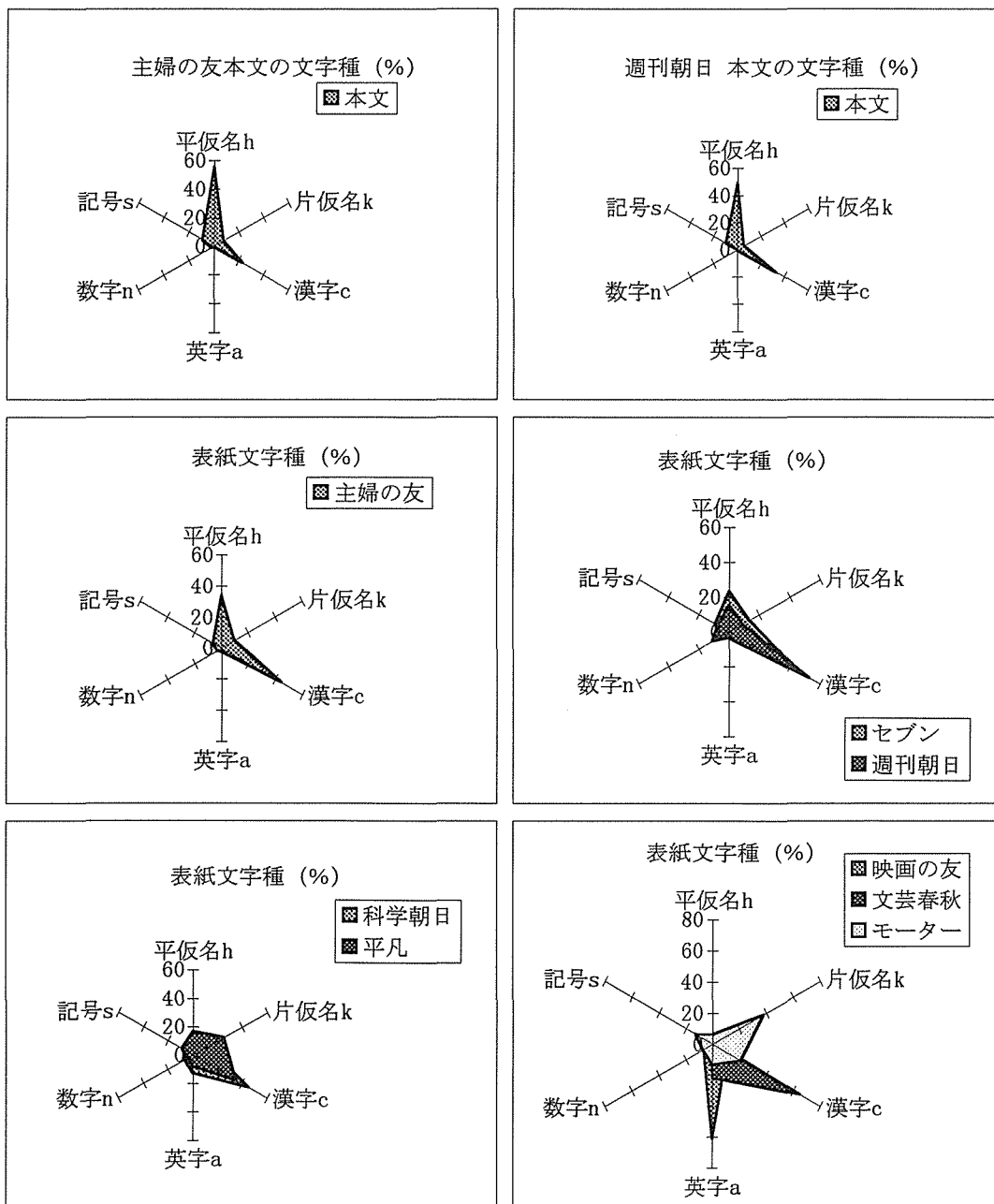


図5B 雑誌別文字種 (%)



#### 4.2.4. 全体の傾向

平仮名の割合の高い『主婦の友』、漢字の割合の高い『文芸春秋』『週刊朝日』、片仮名の割合の高い『平凡』『モーターファン』、英字の割合の高い『映画の友』など雑誌ごとにかなり傾向がわかっていくことがわかった。

また、文字数が増加すると、『主婦の友』や『女性セブン』のように平仮名の割合が増え、文字数が少ないと『文芸春秋』や『週刊朝日』のように漢字の割合が高くなることもわかった。これらの文字種使用の特徴は雑誌の内容と関連があると考えられる。

## 5. おわりに

『主婦の友』『文芸春秋』『週刊朝日』の三種を中心に雑誌八種の表紙について文字数、文字種の調査を行った。

まず、文字数については、1950年代から1994年までで増加しているもの(『主婦の友』『平凡』)、文字数が少ないままでそれほど変化しないもの(『文芸春秋』)、1970年代まで増加し、その後減少するもの(『週刊朝日』)があった。また、『主婦の友』『週刊朝日』ともに1970年代にもっとも大きく文字数が増えていることは注目される。

次に、文字種については、平仮名の割合の高い『主婦の友』、片仮名の割合の高い『平凡』『モーターファン』、英字の割合の高い『映画の友』のように、雑誌ごとに特徴がみられることを指摘した。また、表紙は本文よりも漢字の割合が高く、平仮名の割合が低い。これは、限られたスペースでより多くの情報を伝えようとするために、表語性の高い漢字の割合が高くなるためであると解釈した。

さて、雑誌の用語用字については、すでに『現代雑誌九十種の用語用字』(国立国語研究所 1962)がある。また、現在、1994年発行の雑誌についての新雑誌調査(200種)が進行中である。本調査は、『現代雑誌九十種の用語用字』(1962)と、新雑誌調査の間をつなぐものとして、新雑誌調査のテスト・サーベイとして行った。そこで、最後にいくつか問題提起をし、今後の課題を述べておく。

文字数について、(1)増加する、(2)少ないままあまり変化しない、(3)増加し、減少する、という雑誌の傾向を三つ確認した<sup>18</sup>。このほかには、次の三つが考えられる。(4)最初文字数が多く次第に減少する、(5)最初から文字数が多いまま変化しない<sup>19</sup>、(6)最初文字数が多く、減少し再び増加する<sup>20</sup>。しかし今回の調査対象の主なものには(4)~(6)のような雑誌はなかった。他の雑誌の調査をあわせて検討する必要がある。また、1970年代に大幅な増加がみられる、としたが、そうだとすれば、なぜ1970年代にみられるのか、具体的な増加の様子や細かい年代を調べるとともに、電算写植の導入などの何らかの外的要因が働いているのかどうかを明らかにすべきである。

雑誌ごとに文字種のちがいがみられることを指摘したが、どのような語の増加が、どのような文字種の増加に関わっているのか、をみる必要がある。現在、同じ調査対象についての語彙調査が進行中である。これらの問題について分析し、報告したい<sup>21</sup>。

## 注

- 1 ここでは、「平仮名」「片仮名」「漢字」など文字体系の別を「文字種」と呼ぶ。
- 2 1997年4月現在進行中の1994年発行雑誌を対象とした調査を基準に、十年間隔とした。
- 3 中野洋 (1996.10) 『パソコンによる日本語研究法入門 語彙と文字』(笠間書院)。また、本稿で分析に用いたプログラムは、<http://www2.kokken.go.jp/~nakano/public>に公開中である(1997.9月現在)。
- 4 『週刊朝日』1994年1月7・14日合併号
- 5 「セブン」と略すことがある。
- 6 「モーター」と略すことがある。
- 7 その増加の仕方は、『平凡』が増加傾向にありつつけるのに対し、『主婦の友』は1970年代以降安定している、のように、一様ではない。
- 8 『文芸春秋』53巻12号(1975.12)
- 9 『文芸春秋』72巻16号(1994.12)
- 10 「本文」は、ページを標本とするランダムサンプリングでのデータにもとづく。小説・投書・説明文などである。ただし、見出しをふくむ。広告はふくまない。
- 11 『図説日本語』(1982)206頁〔新聞における文字の使用率〕図2によれば、平仮名は35.3%、漢字は46.1%となっている。この数字は、『週刊朝日』の場合は本文に近く、また、『主婦の友』の場合は表紙に近い。片仮名・英字についても表紙のほうが本文よりも使用率が多い。これらを用いれば目立たせの効果が生じるが、その差は、統計的に有意を認めるほどではない。また、算用数字は多く、記号は少ない。巻号、年月日は必ず表紙に入れなければならない情報であり、文字総数が少なくなれば数字の割合は相対的に多くなる。本文に必ずある句読点は表紙には必ずしも必要ない(ただし、「天保」の世に学べ、平成の凌ぎ方。)(『週刊朝日』99巻1号1994.1)のように、1994年には句読点のみえる表紙もある)。しかし、この差も統計的にははっきりあらわれるものではない。
- 12 創刊もない1949年に発行された雑誌を加えて調査した。『主婦の友』(1)『文芸春秋』(8)『映画の友』(8)『科学朝日』(8)。( )内は冊数。
- 13 この数字は『女性セブン』と文字数の多い時期の『週刊朝日』の文字種分布の類似を反映したにすぎない。『週刊朝日』がその後文字数を減らしていけば、『女性セブン』の文字種分布とも違ってくる。
- 14 ここでは、英字表記のものと、ローマ字表記のものは分けず一括して「英字」として扱った。
- 15 『科学朝日』『平凡』も他誌より英字の割合が高い。
- 16 雑誌名がどの文字種で表記されているかは重要である。たとえば、『モーターファン』は1960年代には雑誌名が片仮名だが1994年には英字になっている。また、『映画の友』『平凡』『文芸春秋』では、雑誌名が漢字とアルファベットの両方で並記されている時期があるために、英字の割合が高くなっている。
- 17 先に述べたように、『文芸春秋』の漢字の割合が高いのは、総文字数が少なく他の文字種の介入が少なかったためである。とすれば、より文字数の多い『映画の友』『平凡』とは厳密には分けるべきだ。
- 18 他の五種の雑誌は、後年のもののほうが文字数がふえており(1)にあてはまる。
- 19 雑誌『世界』は表紙に目次があり、その文字数は1955年から10年間隔毎年12冊の平均で259.4、269.0、215.4、190.3字と多い。検証段階でみつけたので記す。

20 雑誌『中央公論』の文字数は1955年から10年間隔各年12冊の平均で 84.4, 21.7, 24.7, 76.0字となっている。1965年, 1975年では1行の特集名があるかないかであった。検証段階でみつけたので記す。

21 表紙の文字数が多いものは, 表紙がいわば目次の役割をになっていると思われるものも少なくなかった。どのような情報をどのような形で伝えているのか, 文字はどう関与しているのか。

また表紙を構成する要素としては, 文字の大きさ, 形, 色, 縦組み, 横組み, 斜め組みの別, 絵, 写真, レイアウト, 表紙の大きさなどもけっして無視できない。本稿ではその一部である文字数と文字種をとりあげたにすぎないが, 今後このような要素も含めた考察が必要である。

#### 引用文献

国立国語研究所編 (1962) 『国立国語研究所報告21 現代雑誌九十種の用語用字』 秀英出版  
林 大 ほか編 (1982) 『図説日本語 グラフで見ることばの姿』 角川書店  
中野 洋 (1979) 「文章の表記」 『文章作法事典』 101-112 東京堂出版

#### 資料

『映画の友』 映画世界社 (のち, 株式会社映画の友)  
『科学朝日』 『週刊朝日』 朝日新聞社  
『主婦の友』 主婦之友社 (のち, 主婦の友社)  
『女性セブン』 小学館  
『文芸春秋』 文芸春秋新社 (のち, 株式会社文芸春秋)  
『平凡』 平凡出版株式会社 (のち, 株式会社マガジンハウス)  
『モーターファン』 三栄書房

#### 付 記

本調査は, 特別研究「日本語の変化予測についての基礎的研究」の一部である。

(原稿受理日: 1996年12月25日)

---

中野 洋 (なかの ひろし)

国立国語研究所言語体系研究部 115 東京都北区西が丘3-9-14

nakano@kokken.go.jp

中川 美和 (なかがわ みわ)

国立国語研究所非常勤研究員

miwanaka@kokken.go.jp

## **Test survey about changes in use of letters on magazines covers:**

Mainly in “Shuhu-no-Tomo”, “Shukan Asahi” and “Bungei Shunju”

NAKANO Hiroshi

The National Language Research Institute

NAKAGAWA Miwa

The National Language Research Institute

### **Keywords**

the number of letters, the varieties of letters, 1970's, logography

The survey showed that there are large changes in use of letters on covers of magazines from 1950 to 1994. We surveyed mainly three magazines, “Shuhu-no-Tomo”, “Shukan Asahi” and “Bungei Shunju”. In addition, five magazines, “Heibon”, “Eiga-no-Tomo”, “Moterfan”, “Kagaku Asahi” and “Josei Seibun” were surveyed to further know the changes in the number of letters on covers of magazines and to find different trends in use of letters.

For example, in covers of “Shuhu-no-Tomo”, the number of letters is growing from 1950's to 1994. Use of few letters in covers of “Bungei Shunju” in 1950's remain as they were until 1994.

In “Shukan Asahi”, the number of letters is growing till 1970's, and since then it has continued to decrease in 1980's and even till 1994.

In “Shuhu-no-Tomo” and in other magazines except for “Bungei Shunju”, the number of letters grew largely in 1970's.

Further, there are varieties in using Japanese letters on covers of magazines.

In “Shuhu-no-Tomo”, the ratio of Hiragana is highest in the covers of magazines. In “Heibon” and “Moterfan”, the ratio of Katakana is higher than in other magazines. In “Bungei Shunju”, the ratio of Kanji is highest. In “Eiga-no-Tomo”, the ratio of alphabets is higher than in others.

In a cover, the ratio of Hiragana is lower and the ratio of Kanji is higher than in the running content of magazines because Kanji can give more information than Hiragana do in the limited space of a cover.